



## 世界一大雪山がきれいに見える町 比布町



### 比布町基礎データ

|            |                            |           |                        |
|------------|----------------------------|-----------|------------------------|
| 総人口        | 3,356人<br>(R7年6月末現在)       | 製造品出荷額    | 1,052百万円<br>(R3経済センサス) |
| 高齢人口（高齢化率） | 1,476人 42.5%<br>(R6年1月末現在) | 卸・小売年間販売額 | 2,580百万円<br>(R3経済センサス) |
| 世帯数        | 1,735世帯<br>(R7年6月末現在)      | 一般会計規模    | 4,437千円<br>(R7当初予算)    |
| 人口密度       | 38.6人/km <sup>2</sup>      | 町の木       | ななかまど                  |
| 面積         | 86.90km <sup>2</sup>       | 町の花       | すいせん                   |
| 農業産出額      | 299百万円<br>(R5町村別農業産出額)     | 町の鳥       | なし                     |

### 比布町の紹介



町マスコットキャラクター スノーベリーといちご狩り

比布町は、北海道のほぼ真ん中に位置し、旭川市に隣接する人口約3,400人の小さな町です。

夏は、大正時代から栽培され、100年以上の歴史をもつ「びっぷいちご」が比布町の主役です。初夏には、観光農園「いちご狩り」を楽しみに、多くの観光客で賑わいます。

冬の主役は、道北最大級の広大なゲレンデを誇る「びっぷスキー場」。上川盆地や大雪山連峰を望む絶好のシチュエーションで、良質なパウダースノーを満喫できるスキー場として知られています。比布町の基幹産業は「農業」で、道内でも有数の米どころとしても知られています。なかでも、道産米の最高

峰とされる「ゆめぴりか」は、町内の上川農業試験場から誕生したお米で、いわば比布町は「ゆめぴりかのふるさと」です。そのほか、道内一屈指の出荷量を誇る「オクラ」や、雪の下で甘さが増した千本ネギなど数多くの農産物を栽培しています。

### 子育て世代が集うまち 3年連続 社会増

多くの自治体同様、比布町の人口減少は進んでいます。人口が最大になったのは昭和30年（1955年）の8,516人で、以後、人口減少が続いています。

本町の人口減少対策は、働く場所や買い物環境をはじめとする経済、医療や高等教育などが整っている旭川市の隣町という地理的条件を活かし、子育て世代をターゲットとした移住政策と、転出を抑えるために町民がいつまでも住み続けることができる環境づくりの2つのテーマを基本とした政策を実施しています。

子育て世代の移住・定住については、新築して居住した子育て世帯に対し、義務教育期間の子ども1人あたり100万円の補助（最大2名。中古物件購入者は50万円）、中古物件

購入者がリフォームする際のリフォーム補助（上限50万円）、中古物件解体補助（上限100万円）などを実施した結果、特に子育て世代を中心に移住・定住が進み、直近の令和4年～令和6年の3年間は転入者が転出者を上回る転入超過となっています。それに伴い、同規模自治体が軒並、子どもの数が減少しているのに比べ、ここ数年は1学年の平均児童生徒数を維持することができています。

## 充実した子育て・教育環境

もちろん、経済的な支援だけでは移住・定住は進みません。この土地で子育てをしようと思えるためには、相応の環境の充実が重要になります。

比布町では、令和4年に町内にある小中学校をひとつに統合し、完全小中一貫校（義務教育学校）を開校しました。義務教育学校のメリットは、子どもの発達に応じて9年間でじっくりと子どもを育てることができるということです。これまでの義務教育は小中に分かれていたため、同じ義務教育でも途中で分断されていました。事務的な引継ぎはありますが、病院に例えれば紹介状による引継ぎのようなもので、子どもの特性など、細かな部分の共有はできていませんでした。

その結果、例えば、小学校から中学校に進学後、困りごとを抱える子どもがいた場合、小学校側は「もう引き継いだので関係ない」、中学校側は「もう少し小学校で成長させてから進学させてほしい」といった責任の押付け合いが生じ、義務教育修了後の社会に羽ばたくための準備という、本来の義務教育の役割が十分果たせていませんでした。

義務教育学校では、全教職員にとって全児童生徒は「自分の学校の子どもたち」となり、困りごとはもちろん、得意分野の共有、それぞれの教職員が持つ専門性を活かした授業体制の構築が可能となります。

また、町内の認定保育園との連携も強く、

就学前から子どもの様子を共有、就学後も連携したフォロー体制をつくっています。



7年生が主役の比布中央学校入学式・進級式  
約200人を前に後期課程への抱負を述べる

## 駅とともに歩んできたまち

開拓直後の本町は、道北の良質な木材を旭川や道央に運ぶための拠点として栄えました。

当初は石狩川の流水を活用していましたが、開拓からわずか3年で国鉄の駅が設置され、ヒト・モノが行き交う交通の要衝としての地位を確立しました。

また、昭和55年に放映されたピップエレキバンのCMに比布駅が使用され一躍全国区に。全盛時には観光バスが停車するほどの観光スポットとなりました。

このように開拓期の北海道経済や町民の生活を支え、比布の名を全国に知らしめてくれた比布駅も利用者の減少と老朽化の進行により、縮小の危機を迎えることになります。

平成25年、町は、JR北海道から現存の駅を解体し待合スペースのみの簡易的な待合所を設置する旨の報告を受けました。報告当初は、時代の流れと共にやむを得ないという意見もありましたが、これまでの歴史を振り返り、比布駅は比布町の歩みそのものであるという認識のもと、厳しい財政状況ではありましたが、全額町費による町施設として建設することとしました。

新比布駅は、待合スペースの外、町の特産物販売所を兼ねたカフェスペースを備える交流拠点として生まれ変わり、鉄道ファンはもちろん、町内外から多くの方々が訪れる場と

なっています。



比布駅の外観（上）とカフェ（下）

## 世界一大雪山がきれいに見えるまち

大雪山連峰は、北海道最高峰である旭岳をはじめとする2,000m級の峰々の総称です。最初にお断りをすると、比布町は、この大雪山連峰の山々には1ミリも接していません。

しかし、適度に離れた距離に位置するため連邦の全容を見渡すことができ、比布の住民は昔から比布から見る大雪山が一番きれいだと、密かに思っていました。

そうした中、平成26年、道央自動車道の比布大雪パーキングエリアに隣接する町有展望広場で、それまで放置されていた高くそびえる木々を剪定したところ、大雪山連峰の全容が浮かび上がり、作業に携わった人たちが一様に感嘆の声をあげ、しばらくの間立ちすくみました。この「ずーっと見ていたくなる」景色をPRできないかと、長年の比布町民の心の声を言葉にしたのが、「世界一大雪山が

きれいに見えるまち」というキャッチコピーです。（周辺自治体の了解は得ていません...）

町内の子どもによる絵画グランプリや、フォトコンテストなどを開催し、毎年、多くの力作が出展されているほか、最近では、SNSの発信により広場を訪れる人が増えています。



比布大雪PA展望広場から見る大雪山

## ずーっと、ぴっぷ。

「この地に鋤を下した事が先人の最大の遺産である」。町の第1期総合戦略の前文に記したとおり、本町の最大の強みは地質学上の優位性にあります。北海道第2の都市旭川市の隣町であると同時に、2本の国道、高速道路が通る地理的条件は、人馬が主役の開拓期からデジタル社会に変化した今も依然として強みと言えると考えています。

令和6年に比布町は先人が開拓の鋤を下してから130年を迎えました。130年のキャッチフレーズは「ずーっと、ぴっぷ。」。まちの名前は、関わった人たち全ての想いをつなぐ大切なバトンです。まちがあり続けるのは容易な時代ではありませんが、ずーっと、ぴっぷであるために、新たな10年、100年に向けて歩みはじめています。



世界一大雪山がきれいに見えるまち  
ずーっと、ぴっぷ。ロゴマーク



# 比布町の四季



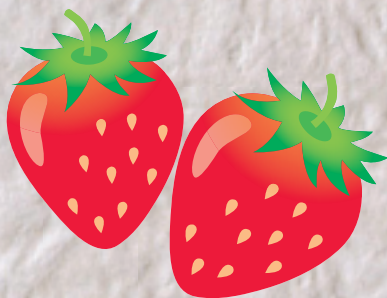
【春】冬の装いのまま春の訪れを待つ大雪山



【夏】「ゆめぴりか発祥の地」上川農業試験場と大雪山



【秋】収穫を見守る大雪山



【冬】1年で一番雄大な姿を魅せる大雪山